

2.3.児童生徒対象の調査結果について（自由記述分析）

2.3.1 概要

問 5 の自由記載は「これから先、あなたがどのように過ごしたいか、どんな場所に行きたいかについて下のボックスに自由に書いてください」というテーマであった。自由記載の回答数は 197 件であり、内容については長短があった。

全ての自由記載の内容について、テキストマイニングを行った。テキストマイニングとは、樋口(2020)によると、テキスト型のデータを分析する方法であり、コンピューターによってデータの中から自動的に言葉を取り出し、様々な統計手法を用いながら、探索的な分析を行うものである。

本調査で実施したテキストマイニングの手法は共起ネットワークを用いた抽出後の関係性を分析する手法を用いた。分析に際しては、樋口耕一が開発したフリーソフトである KH-coder(過去に公開されたベータ版)を用いた。分析者については、心理・福祉に係る学識経験を有する者 2 名で行った。

注) KH Coder の分析では自動処理されるため、今回の分析の目的にそった形で語を完全に抽出できるとは限らない。そこで KH Coder の強制抽出機能を用いて、語として認識できるように微調整を行った。

注) 同義語や表記の揺れを 1 つにまとめるため、KH coder の文字の揺れ機能を用いてまとめた。

2.3.2.抽出語の出現回数

抽出語については、同ソフト内の KWIC コンコーダンス機能(樋口：2020)を用いて文脈を確認しながら必要に応じて強制抽出(注1)や文字の揺れ(注2)の処理を行った。強制抽出語は「学校生活」、「行きたい」とし、文字の揺れについては、以下のとおり言葉を統合して抽出した。

- ・先生、または・担任 → 教師
- ・小学校、または・中学校、または・高校、または・学校 → 学校
- ・行く、または・行ける → 行ける

結果、出現回数を 10 回以上に設定した上位の出現語には「学校」、「行ける」、「自分」、「場所」、「人」、「教師」、「行きたい」、「勉強」、「過ごす」、「好き」、「言う」、「出来る」、「今」、「友達」、「楽しい」、「自由」、「ベース」、「家」、「登校」、「生きる」、「分かる」、「頑張る」が抽出された。

(注1) KH Coder の分析では自動処理されるため、今回の分析の目的にそった形で語を完全に抽出できるとは限らない。そこで KH Coder の「強制抽出機能」を用いて、語として認識できるように微調整を行った。

(注2) 同義語や表記の揺れを 1 つにまとめるため、KH coder の「文字の揺れ機能」を用いてまとめた。

2.3.3.共起ネットワークについて

樋口・中村・周（2022）によれば、共起ネットワークとは、抽出した語の関係性を視覚的に理解しやすくするためのものである。まず同じ文章の中で語と一緒に使われていることを共起と呼ぶ。共起ネットワーク上で、実線でつながっている語同士は、共起が多い組み合わせということである。つまり、同じ話題の中でよく用いられる語と推測でき、実線でつながった語のグループを見れば、文章中の主な話題（トピック）を読み取れるものである。ただし、実線か点線かはグループの違いを表すものなので、つながりの強さを意味するものではない。

上記の抽出語の関係性を視覚的に理解しやすくするために、先述した共起ネットワークを用いた。

この時、今回の自由記載から抽出された出現回数 10 回以上の語を用いて、最大出現数を 90 として共起ネットワークを作成した。その際、ネットワークが複雑にならないように最小スパニングツリー機能を用いて分析した。

結果、共起ネットワークに現れた抽出語を用いて、9 つのテーマを見いだした。

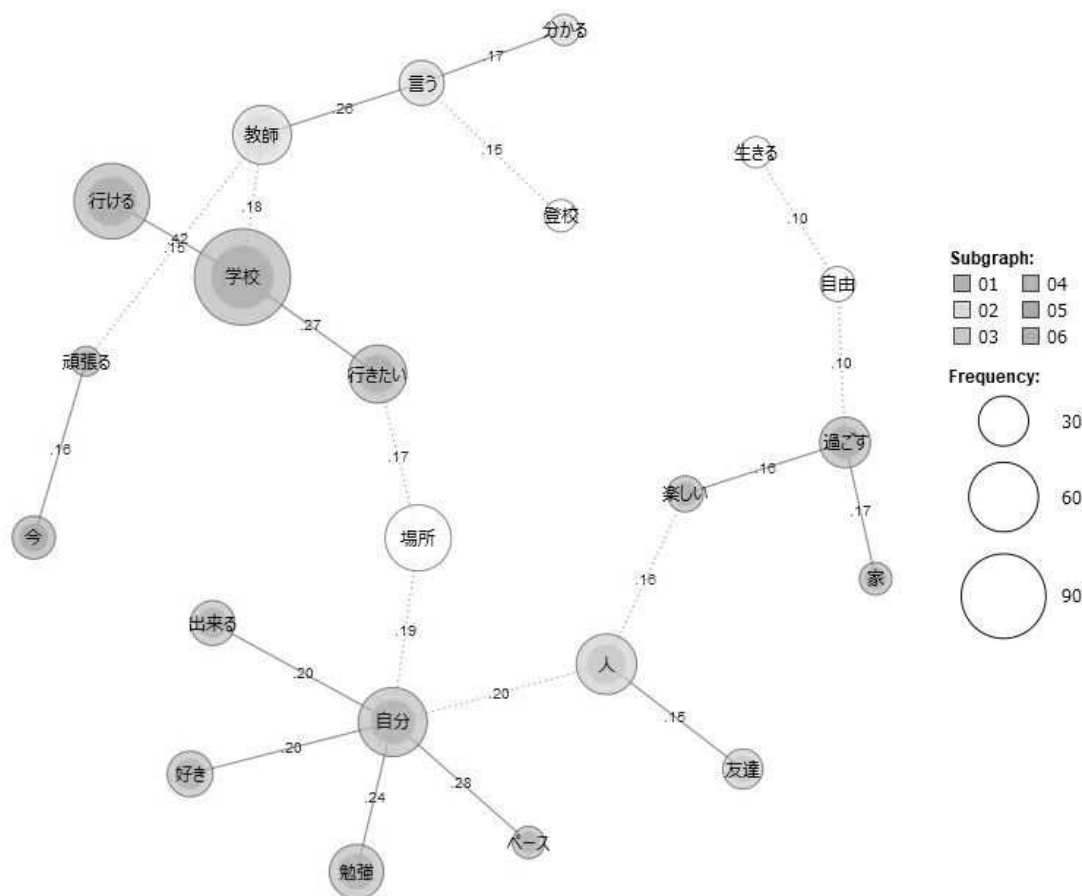


図 2-3-1 問 5 自由記載に係る共起ネットワーク図

2.3.4.テーマの内容と考察について

各共起ネットワーク内にあるテーマについて、以下の通りに解釈した。全て、KH-coder 内にある言葉の前後の文脈を探ることのできるシステムで文脈も見ながら解釈を行った。

まず、【学校への意識】というテーマについては、「学校（117 語）」、「行ける（71 語）」「行きたい（41 語）」で構成されている。学校に行けなくなった（行かなくなった）という設問であるので、「学校」という語が頻出することは当然であろう。「行ける」については、学校や希望の場所に移動する意味合いの言葉として頻出している。例えば「楽しく健康で暮らし、勉強も頑張って、大学に行って、学びたいことを学んで、仕事に就いて、楽しく幸せに暮らせるように今たくさんつらい事や色々経験していきたい（中3女子）」などの声である。また、「行きたい」は自分自身の希望や願望を表す言葉として頻出している。例えば「学校に行かなくても、出席できる場所があれば行きたい（小1女子）」などである。

つまり、様々な事情により登校しづらい又は登校できない状態（以下、「長期欠席の状態」という）にある児童生徒は、本人の口から「学校」という言葉が出ていなくとも、心のどこかで意識しており、少なからず「学校」のことを考えていることが考えられる。

「学校」という言葉の使用が、登校刺激として強すぎると考えて常に回避しなくてはいけないわけではなく、時期を見計らえば、学校についての話題も扱っていける可能性があるだろう。本調査における保護者調査で回答して頂いた児童生徒の不登校状態が、半数程度が180日以上であったことから、不登校状態に入っただけではなく、ある程度の期間が経てば、上記のような可能性も考えることができるだろう。

【自分のペース】というテーマについては、「自分（59 語）」、「勉強（36 語）」、「好き（25 語）」、「出来る（24 語）」、「ペース（12 語）」で構成されている。このテーマの背景には、不登校状態に陥ったそれぞれのきっかけで傷ついた心のエネルギーを補給するために、好きなことができ、自分のペースで過ごすことができることを望んでいることが考えられる。

抽出語である「勉強」についてデータを検索してみると、学びたいという意識と学びたくないという意識がそれぞれに出現している様子が考えられる。

両極端の意識は、時期の問題が絡んでいると考えられる。「勉強」自体に拒否感が生じたままの状態である一方、不登校状態が長引いたり、受験が視野に入ったりした時などは、自分の将来について考え、学びを得たいことが考えられる。その際は、「自分」の「ペース」で学びたいという意識が強いのは当然であろう。例えば、「無理しすぎずに自分のペースで受験勉強していきたいです(中2女子)」という回答からも伺える。そのペースを尊重することが、児童生徒にとって重要となる。

【人への意識】というテーマについては、「人（45 語）」、「友達（19 語）」で構成されている。長期欠席の状態であり、学校生活から離れることで、「人」との関係性が薄れたり、傷ついたりしていることから、かえって「人」を意識している様子が考えられる。その意識では不安とも考えられ、その状況だからこそ、友人関係や人とのつながりを大切にしたいという意識が強まるかもしれない。

例えば、「信用できる家族みたいな人が居る場所に行って勉強もして、高校や大学にも行ってみたい。でも、今はまだ遊びたい気分もある。(小2女子)」という回答も見られている。

場合によっては、「人」とのつながりを積極的に求めることにもつながるが、それは誰でも良いのではなく、自分自身のことを理解してくれ、安心できる関係性を求めているということである。例えば、「私は「学校」が「先生」「生徒」という関係じゃない「人」と「人」の関係でいられ、私でいられる場所で過ごしたいと思っています。(中3女子)」という回答が得られた。

【教師への意識】というテーマについては、「教師 (42 語)」、「言う (24 語)」「分かる(分からない・分かっていない) (11 語)」で構成されている。学校との窓口が現在は「教師」であることを表すように、学校との関係性で「教師」(担任・先生)などの言葉が頻出している。そのため、「教師」から言われた言葉や状況を示す自由記載が多かった。不登校状態に陥った要因には、「教師」との関係性が関わっている可能性があることも示唆されており、そのような場合、学校との窓口になる役割として非常に厳しい状況になる可能性が考えられるため、学校としては柔軟な対応が求められる。例えば、「なにも分かってない人が勝手な事を言うな！！先生達だってそう。苦しんでいる時に手を出して傷つく前から気づけ！！(小5女子)」という回答や、「なんで前の先生と今の先生で違ったのか分からない。(中3男子)」という回答が得られた。

【安心基地】というテーマについては、「過ごす (31 語)」、「楽しい (15 語)」、「家 (12 語)」で構成されている。このテーマでは、自分自身が安心、安全な居場所に居たいということが考えられる。そのため、最も安心安全が得られそうな「家」という単語が抽出されたのだろうが、これに限らず、安心できる場所を求めていることが考えられる。加えて、「過ごす」「楽しい」が抽出されていることから、単に場所(居場所)の問題ではなく、その場所でどのように「過ごす」のかが重要であろう。例えば、「自分の家でゆるるんと過ごしたい。(中3男子)」という回答が得られた。家という場所が、児童生徒にとって安心できる場所であることの重要性と共に、家の様な安心を感じられる場所の重要性も感じられる。

【今を生きる】というテーマについては、「今 (22 語)」、「頑張る (10 語)」で構成されている。抽出語を検索すると、不登校状態にいる児童生徒一人ひとりが、「今」この瞬間を「頑張る」試みをしている場合と、そうでない場合がある。当然、上述した【自分のペース】のように、時期の問題が大きく影響しているかもしれない。どちらにしても、「今」この瞬間を生きることとは、どのような状況であるにしても容易なことではない。例えば「自分は、楽しい毎日で過ごして、よりこち良い学校に行きたいと思います。僕は、自立に向けて頑張っているところです(中2男子)」という回答が得られている。

【自由】というテーマについては、「自由 (14 語)」、「生きる (11 語)」で構成されている。【安心基地】とつながる「自由」から派生するテーマである。抽出量も少ないが、共起ネットワークの中に確かにある言葉である。自分自身の理想でもあり、主体的な生を求め、目指すところでもある。例え

ば「生きてて良かったって思える人生にしたい。(高2女子)」という回答が得られている。

【登校】というテーマについては、「登校(不登校を含む)(12語)」単独の抽出語とした。不登校に関するキーワードであるため、当然頻出すると考えられるが、ここにあげた他の言葉ほどに高頻度には抽出されていない。【学校への意識】や【教師への意識】とつながる言葉でもあるが、【登校】には学校の窓口としての教師との関連がより強く示唆されるため、柔軟な対応が求められる。

【場所】というテーマについては、「場所(54語)」単独の抽出語とした。【学校への意識】や【自分のペース】と繋がっていることから、例えば「何も考えずにいられる夢のような場所に行きたいです(中3女子)」の回答のように自分自身が居たい「場所」と考えられる。しかしながら、それらが明確につながらなかったのは、学校という場と今いる場の環境的、認識的違いがあり、例えば、中継地点のような「場」がないからではないだろうか。

つまり、現実的側面の強い学校という「場所」と、理想郷とする自分のペースで過ごせる「場所」のギャップがあり、それらをつなぐ「場所」が必要なのかもしれない。「学校でも教室以外を自由に行き来できる場所があれば行きたい(小1女子)」という回答のように学校か家かの二択ではなく、さらなる選択肢の必要性が考えられる。

2.3.5.全体の解釈

ここでは長期欠席の状態にある児童生徒に「これから先、あなたがどのように過ごしたいか、どんな場所に行きたいか」についての自由記述の回答をテキストマイニングによって分析をしてきた。

注目すべき点は、【学校への意識】と【自分のペース】に関係して【場所】が抽出されたことである。多くの場合、不登校状態となると児童生徒が過ごす場所は学校(保健室や別室など)か家の二つの選択肢に絞られる。学校への拒否感が強い場合、保健室や別室であったとしても【登校】することに抵抗感が生まれ、消去法的に家に居ることになる。結果として安心して【自分のペース】が保てる【安心基地】としての家に留まることが多くなるが、一方で、【学校への意識】がなくなったわけではなく、友人と連絡を取るなどの【人への意識】を維持して学校復帰の可能性をつないでいる場合もある。このように児童生徒は不登校状態の中で葛藤し、自分と向き合うことになる。その中で、時期によって現状を打破したいという活力が生まれることがあり、その時に今回抽出されたような【場所】があれば、学校と家との中継地点としての利用が望める。直接的に学校復帰をするにはハードルが高いため、まずは間接的な中継地点である【場所】、いわゆる児童生徒にとっての居場所を活用しながら学校復帰を目指すルートを考える必要があるだろう。このような居場所があることは、児童生徒のみならず、特に仕事等で児童生徒に日中一緒に居ることができない保護者にも安心感を与えることができる。また、このルートは家から学校へのベクトルだけでなく、学校から家へのベクトルの際にも活用が考えられる。つまり、学校で何らかのきっかけで登校が難しくなり始めた時、児童生徒は中継地点の居場所でエネルギーを補給するとともに、学校や保護者は何らかのきっかけの対処を実施することが可能となるだろう。

こうした居場所があったとしても、児童生徒に対する配慮は必要である。学校でのきっかけの内容によっては、初めは自分自身の心身を守るために学校から離れ、家で十分な休息が必要な場合もある。当然ながら中継地点としての居場所があったとしても、強制的に活用させることは避けなければならない。こうした場合は、段階的な支援の一つとして居場所を提供していくことが必要である。また、学校への復帰が全ての児童生徒の目的である必要はなく、その中継地点から、別の新たな居場所を見つけることや、その中継地点そのものが居場所となることも当然あり得る。あくまで居場所を選ぶ主体は児童生徒にある。つまり、児童生徒にとっての多様な選択肢を社会が用意する必要があるということであろう。

長期欠席の状態の児童生徒にとって中継地点としての居場所の必要性を述べてきたが、本県のように離島を含めた広い地域を考えた時、地域差が生じないような居場所の確保が今後の課題の一つとしてあげられるだろう。

〈参考文献〉

- 樋口耕一 2020 『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版』ナカニシヤ出版
- 末吉美喜 2019 『テキストマイニング入門―ExcelとKH Coderでわかるデータ分析―』オーム社
- 樋口耕一・中村康則・周 景龍 2022 『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニングフリー・ソフトを用いた自由記述の計量テキスト分析―』 ナカニシヤ出版